新岡垣風土記 第462回

地名のはなし　内浦（うつら）

岡垣歴史文化研究会　羽山　健一

内浦は、垂見峠のふもとの集落で、交通の要衝として古代から栄えていた。今回は内浦の歴史を紹介する。

平安中期の漢和辞書『倭名類聚抄』に、大宝元（701）年制定の大宝律令に拠る地方行政組織の郡・郷名が収録されている。遠賀郡は、埴生・恒前・山鹿・宗像・内浦・木夜の6郷である。恒前郷は、垣前郷の誤りとされ、岡垣町の吉木・元松原・黒山・糠塚に芦屋町芦屋を加えた区域に比定されている。内浦郷は、岡垣町の三吉・手野・内浦・原・波津の西部地区一帯と推定されている。1郷は50戸編成の規定で、1戸は数家族の20～30人で構成されていたようである。

平安中期の公卿藤原高遠の歌集『大弐高遠集』に、

うつらはまをゆくとて
かりにとは
おもはぬたひをいかなれや
うつらはまをは
ゆきくらすらん

とある。藤原高遠は、寛弘2（1005）年6月に大宰大弐として大宰府に着任した。「遠の朝廷」と呼ばれ、9国2島を管轄した、大宰府の事実上の長官である。同6（1009）年8月に停任となり、帰京するのである。この4年の滞在中に内浦浜に遊び、歌を詠んだのである。内浦浜は、三里松原海岸である。内浦を「ウツラ」と発音した最初の事例である。

寿永2（1183）年10月、安徳天皇と平氏一門は、源氏方に追われ、大宰府から宗像を経て芦屋へ逃れた。その場面を『平家物語』は、「垂水山・鶉浜なといふさかしき険難を凌がせ給ひて、渺々たる平砂へそ赴かれける、いつならはしの御事なれは、御足より出つる血は砂を染め、紅の袴は色をまし、白き袴は紅にそなりにける」と記している。安徳天皇一行の悲惨な逃避行である。垂水山は垂見峠、鶉浜は内浦浜のことである。

乾元2（1303）年の「公文所注進」に宗像社領13ケ郷の記載があり、その中に内浦がある。また、建武元（1334）年3月の「雑訴決断所牒」で建武政権は、内浦郷を含む宗像社領への乱暴狼藉の停止を命じている。鎌倉幕府滅亡後の混乱で、悪党が社領に乱入していたのである。

正平23（1368）年作成の『宗像宮年中行事』の末社55所の中に内浦若宮社がある。また、別項では内浦若宮明神と記している。若宮神社は、内浦小学校の北側に鎮座する、内浦区の氏神様である。この頃は南北朝の動乱期で、戦乱の中で宗像神社は内浦郷の支配権を失うのである。

永禄2（1559）年9月、大友宗麟の兵が突如として宗像郡や遠賀西郷に侵攻した。宗像氏貞は大嶋に避難したが、岡城主の麻生隆守は芦屋で自害したのである。翌年3月、宗像氏貞は宗像郡を奪還したが、同時に遠賀西郷の大友勢を駆逐して所領としたのである。永禄4（1561）年閏3月、宗像大宮司氏貞は、内浦郷全域の30町歩を孔大寺権現に寄進した。氏貞は、200年の時を経て、宗像社領内浦郷を回復したのである。

天正14（1586）年3月、宗像氏貞が病死して宗像家は滅亡した。その後、豊臣秀吉の九州征伐を経て、筑前国は小早川隆景の所領となる。この頃、中世郷村は集落単位の村に分割編成された。内浦郷も内浦村となるのである。

つづく

▲倭名類聚抄の郡郷名

【お知らせ】新岡垣風土記は、筆者の皆さまのご意向により、来月号をもって連載を終了することになりました。長期にわたりご愛読いただき、ありがとうございました。